

## 能代高

(21)

### 16里は遠かった

「クリよりうまい十三里」。  
サツマイモの名産地は川越（埼玉）。江戸から川越までが十三里。だから「九里・四里」うまい……とのしゃれたとか。  
能中の「強歩」は「九里・四里」遠い十六里の道のりで行われた。名づけて「十六里行軍」。

「ヨーイ、ドン」

号砲一発、ワーという五百人の歓声。塚本準一郎（13期、能代市議会事務局長）は、元気に学校をスタートした。

白の運動着。ワラジばき。腰に、にぎりめし二個。塚本が二年生（昭和十三年）の年、この「十六里」が始まった。

「げっぱにならねえに、がんばって走ってこらんひ」  
母がそういつて声援してく

れた。

コースは、能代地方を時計の針と逆回り。能中―7号国道―鶴川―森岳―金光寺―志戸橋―檜山―扇田―鶴形―富根―常盤―向能代―能中。

「うんと走ってもいいし、歩いてもいい。ただし……」

出発前に先生の注意があった。ただし……と付け加えたのは

「志戸橋あたり、キツネ出るので。必ず二人以上組つぐつて通るえにせ」

学校があつた樽子山一帯も、その昔、キツネが出たという。山の中の志戸橋なら、キツネが親子で出てもおかしくない。

「暗れ夜道だし、もしもキツネ出たら、きびわりな」

どの生徒も、内心ヒヤヒヤ。

さて、季節はいまごろ。真夜中の午前零時ちょうど出発。

まず、森岳めざして――

ここが第一関門。元氣いつぱいの中学生。みんな走りどおし。塚本も走った。ゴール寸前であんなにバテてしまうなんて、その時は夢にも思わずに……。

「オー、がんばらねが。ハラごしらえ、さねてもいが」

関門には父母が出て、ぜんざいをふるまつた。

「ああ、いす、いす」  
食べていればおいてきぼりになりそう。甘い誘惑を振り切つて次の関門めざす。

森岳を過ぎるあたりから、集団がくずれる。

キツネが出るとかなんとかおどかされた志戸橋付近。なるほど細い農道。だが、キツネらしい姿を見た生徒は一人もいなかった。

「先生、ウソつだのだから」

まあ、それはどうでもいい。

富根に着くころ、夜が明けだした。その前の、扇田まで来ると、能代の町の灯がチラチラ。

「いつそのごど、まつつぐ学校さ帰ってしまうがな」  
くたくたになつていたので、そんな心理が働く。

塚本は、富根の橋の関門でワラジを取り替えた。自分ではとてもはきかえる力がない。父母の手を借りてやつとこさ。

「どうもいがつたす」  
礼もそこそこに力走、また力走。「心臓破り」は、四日市の直線コース。

「どんたに走つても、進んだ気さね」

せつかくのにぎりめしを捨てた。重くてじゃまだつた。道路わきに「デンとひっくり返つている者も。涙がポロポロ出た。」



さし絵は戸松恭一（新11期・能代高教諭）

「がんばらんひ」

母の姿が目に見えた。

最後の関門は向能代。ここでは名物「東雲羊かん」が生徒を励ました。五十本の限定だった。塚本は、三十番台。文句なしに一本。

「ごっつおーさんです」

このあとが苦しい。

「そら、あともう少しだ、がんばれ」

父母からいくら声援されても足がいうことをきかない。米代川の橋から学校まで、なんと四十五分がかり。ふだんなら十分やそこらで行けるところ。結局この区間で十人ぐらいに抜かれた、残念、無念……。

「オイ、起きれ。汽車におぐれど」

友だちの声で目を覚ました。午後四時だった。四十九番でゴールインした塚本は、そのまま

前庭の芝生で死んだように眠り続けた。八時間もの野外の昼寝。この行軍は、昭和十八年までで打ち切られた。上級生が勤労動員で行ってしまい、強歩どころではなくなった。

通算六回の大会中、最高記録をたてたのは石川清寛（15期、常盤中教頭）。5時間38分。

「まさか六時間以内で学校さ帰って来る生徒、だばいね」

その予想をはねのけ青春を燃焼させた見事な走りっぷりは語り草になっている。（敬称略）

